熊本大学教育学部紀要，自然科学
第39号，41－50，1990

幼児の運動遊びに関する研究*

競争に及ぼす要因分析

中川保敬・川崎順一郎・唐杉　敬**

Study of Children's Play*

Analysis of Competition

Yasutaka NAKAGAWA, Junitiro KAWASAKI and Takasi KARASUGI**

(Received May 21 1990)

Actions children's play include the fundamental factors of sports, which are competition, strength finding and imitation. There, young children's play promise the future sports activities. Also, these factors help promote to broaden the young children's play.

Amoung these factors, this study will discusses the competitive factor and analyse whether bringing competition into the play will affect the trend of activities or the significance in the play.

As a result of the study, the following three functions were observed:

1) Competitive play tends to stimulate activeness and constructiveness.
2) Competitive-ness while playing will attract the children to create room, divice and rules.
3) Competitive play amoung the 4 to 5 year olds will develope the spirit of team play.

Key words : competition, competitive play, children's play

緒　言

子どもの生活はすべて遊びであると言われる程遊びは，子どもにとって心身の発達の過程において重要な意味を持っている[1)2)].

ところが，今日この大切な子どもの遊びが，社会のさまざまな事情により奪われ，減少している現象が見られる．この事実については，高橋[3)]らが「児童の屋外遊戯時間に及ぼす社会的要因」の研究において明らかにしている．

遊びの減少に伴ない，遊べない子どもや遊ばない子どもの数が増加し，また，自分たちで創意工夫する遊びが少ない[4)5)]ことが問題となっている．この遊びの減少傾向は，幼児期を経て児童期になり，しだいにその影響が現われ始めると考えられる．その現象を教育現場では，「数年前に受け持った子どもと今受け持っている子どもとを比較して，鮮明にその違いがみえてくる」[6)]と捉えている．

したがって，児童期における遊びの減少の影響による変化は，その前段階としての幼児期における遊びの問題が問われることになると考える．

---

* 本研究の一部は，第34回日本体育学会（1983年8月北海道大学）および体育・スポーツ経営学会（1989年3月帝京大学）で発表したものである．

** 熊本大学教養部，保健体育教室

幼児が幼児期の遊びを通して，集団生活の中で自立する能力や態度を身につける個の充実を図っていくための環境の減少[7]と，遊び内容の浅薄さに原因がある様に考える．ゆえに，幼児期の遊びを豊かにする解決策を探るためには，幼児が遊びの楽しさを理解し自ら進んで遊びに没入できるような遊びの課題を分析することが重要である．

遊びの課題は，一般に競争，力試し，模倣の三つが[8]考えられる．特に，集団生活を通して個の充実を図るためには，競争遊びの要因が大きく関与してくると考える．

競争とは，共通の目標に向っていろいろな手段を用いて，できるだけ早く，できるだけ確実に目標に到達しようと努力している人々の間に営まれる関係である[9]と規定できる．さらに競争は，ルールに則り勝敗を争う場合に競争が成立し，お互いが自分の力を十分に発揮し合うことは，その事自体競争していると同時に協同している事であり，競争と協同は表裏一体の関係である[10]．運動遊びの中の競争を多く行なうことは，幼児の個の充実を図り，さらに個と個の結びつきである協同も集団活動への参加により学ぶことができる重要な要素を含んでいると考える．

しかし，この競争が，各個人のパーソナリティーへの影響や運動遊びの構成要因のどの要因との関連性が高いかどうかという分析的な研究は少なく，運動遊びの現状分析的研究が一般的であると考える．丹羽[11]らが，児童を対象に屋外遊び集団の変容および遊びパーソナリティーの研究を行ない，遊びの頻度と情緒性についてその関連を探り論述している．しかし，幼児についての研究はみられない．

従って，本研究においては，幼児を対象に運動遊びの中で競争遊びの頻度に着目し，その頻度の違いから，幼児の日常の行動形態への影響がみられるかどうか，また，運動遊びを構成する要因との関連性の高さについて明らかにしたい．さらに，この分析から競争遊びの効果としての機能を探ることを目的とする．

方　法

競争的要因と行動形態や遊びの要因の違いを探る為に，２回の調査を基に分析・検討を加えた．

●第１次調査については，東京都多摩市Ｓ幼稚園４歳児（ 146名），５歳児（ 127名）の父兄 273名に対し昭和57年10月から11月にかけてアンケート調査を行なった．

調査の内容は，子どもの運動生活を構成する運動遊びの内容，遊び仲間，運動遊びの施設，保護者の遊びに関する子どもへの関与のしかたの４つの観点から行なった．

●第２次調査については，対象園を熊本市の西部地区12保育園と北部地区９保育園３歳児（25名），４歳児（34名），５歳児（42名）の計 101名の担任の保育者について，園児の日常生活の行動形態や運動遊びの内容，遊び仲間，運動遊びの施設の４視点から調査を行なった．調査期間は，昭和62年11月から12月である．

調査結果の処理については，篠原[12] DKCROS やアンケート集計プログラム[13]の３次クロス，数量化Ⅱ類，χ^2検定，PHI 係数[14]を用いて有意差の判定及び関連性の強さの判定を行なった．χ^2検定については，有意水準５％以下の項目についてのみ検討を加えた．

結　果

1．4歳児・5歳児の競争遊びの頻度からみた遊びの要因の関与度の変化

4歳児において，競争遊びの頻度の違いからみた運動遊びの要因項目の変化傾向は，頻度が高い子どもほど力試しの運動遊び，次の遊びへの提案・キッカケ，運動遊びでの探索発見，3歳まで子どもと十分遊んだ，遊びの工夫，運動遊びへの関心が多い又は高い結果が得られた．また，やや多い傾向が見られる項目は，仲間の人数，運動遊びの割合，仲間の雰囲気であった．また，一人で遊ぶは，競争遊びの頻度が多いほど，一人で遊ぶことが少ない傾向がみられた．これらの結果をまとめたものが，表1である．

5歳児においては，競争遊びの頻度の違いにより，頻度の多い子どもに多くみられた項目は，力試しの遊び，次の遊びへの提案・キッカケ，運動遊びへの冒険心，遊びへの適応性，運動遊びでの

表1．競争遊びを多く行う子どもの特徴

4歳児		5歳児	
項目	傾向	項目	傾向
力試し	多い	力試し	多い
次の運動遊びへの提案キッカケ	多い	次の運動遊びへの提案キッカケ	多い
運動遊びでの冒険心	多い	運動遊びでの冒険心	多い
遊びでの適応性	多い	遊びでの適応性	多い
一人で遊ぶ	少ない	一人で遊ぶ	少ない
運動遊びでの探索発見	多い	運動遊びでの探索発見	多い
仲間の人数	やや多い	仲間の人数	多い
3歳まで十分子どもと遊んだ	多い	3歳まで十分子どもと遊んだ	多い
仲間の雰囲気	やや良い	仲間の雰囲気	良い
遊びの工夫	多い	遊びの工夫	多い
運動遊びの割合	やや多い	運動遊びの割合	多い
運動遊びへの関心	多い	運動遊びへの関心	多い

表2．競争遊びを多く行う子どもの特徴（全体）

	アイテム名	傾向
Q9	自己中心的	やや多い
Q10	独裁的	多い
Q13	活動的	多い
Q15	行動範囲が広い	多い
Q16	競争心	多い
Q17	挑戦意欲	多い
Q18	積極的	多い
Q19	よくしゃべる	多い
Q21	声が大きい	多い
Q22	自分の意見が言える	多い
Q23	協力的	差無し
Q25	友達の世話	差無し
Q26	みんなの意見をまとめる	多い
Q27	堂々としている	やや多い
Q28	勇気がある	多い

探索発見，仲間の人数，3歳まで十分子どもと遊んだ，仲間の雰囲気，遊びの工夫，運動遊びの割合，運動遊びへの関心であった．少ない傾向を示した項目は4歳児と同様に一人で遊ぶ遊びに特徴的にみられた．

2．競争遊びの頻度と行動形態について

競争遊びの頻度と幼児の行動形態（15項目）とのクロス集計を行ない検討した結果が，表2（P43参照）である．

競争遊びの頻度の高い子どもとあまり頻度の多くない子どもとの比較において，頻度の多い子どもに多くみられる項目は，独裁的，活動的，行動範囲が広い，競争心，挑戦意欲，積極的，よくしゃべる，声が大きい，自分の意見が言える，みんなの意見をまとめる，勇気があるであり有意な差（$p<0.05$）がみられた．また，競争遊びの頻度の差によりやや多くみられる傾向は，自己中心的，堂々としているであった．

3．競争遊びの頻度と遊び要因について

競争遊びの頻度の多い子どもとあまり頻度の多くない子どもとの遊びの構成要因項目（15項目）を比較した結果が，表3である．

競争遊びの頻度の多い子どもが，頻度の少ない子どもと比較して多くみられる遊び要因項目は，運動遊びの活発さ，自主性，走ったり・跳んだりの遊び，ボールやラケットを使った遊び，試合やゲーム，力試しの運動遊び，用具・場所・ルールの工夫，遊び方の発見適応性，遊びでの冒険心，遊びの種類数の13項目であった．また，競争遊びの頻度の多い子どもにやや多くみられた要因項目は，遊びのキッカケの導入場面，展開場面，まとめの場面であった．

差がみられなかった項目は，固定施設での運動遊び，ごっこ遊び，砂場での遊びであった．

表3．競争遊びの多い子どもの特徴（全体）

	アイテム名	傾　向
Q30	運動遊びの活発さ	多い
Q31	運動遊びへの自主性	多い
Q32	走ったり跳んだりの遊び	多い
Q33	固定施設	差無し
Q34	ごっこ遊び	差無し
Q35	ボール，縄，ラケット	多い
Q36	砂場	差無し
Q37	試合やゲーム	多い
Q67	力試し	多い
Q68	模倣遊び	差無し
Q69	用具の工夫	多い
Q70	場所の工夫	多い
Q71	ルールの工夫	多い
Q72	遊び方の発見適応性	多い
Q73	遊びでの冒険心	多い
Q74	遊びの探索発見	多い
Q75	遊びの種類	多い
Q76	遊びのキッカケ（初め）	やや多い
Q77	遊びのキッカケ（中）	やや多い
Q78	遊びのキッカケ（終わり）	やや多い

考　察

1．競争遊びの頻度からみた調査対象群の判別

① 幼児の行動形態からみた判別

競争遊びをよく行なっている幼児とその頻度が少ない幼児との比較を林式数量化Ⅱ類を用いて判別を行なった結果が，図1である．

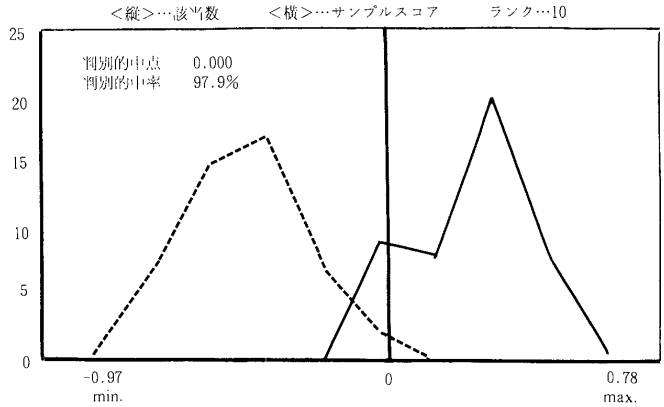

図1　競争遊びの頻度を基準とした行動形態の判別度

競争遊びの頻度（外的基準）により幼児の行動形態（15項目を説明変数）から判別分析を行なった結果，判別的中率９７．９％と高い判別値が得られた．この結果より，幼児期における競争遊びの頻度の違いには，日常生活の中での行動形態（自己中心的，独裁的，活動的，行動範囲が広い，競争心，挑戦意欲，積極的，よくしゃべる，声が大きい，自分の意見が言える，協力的，友達の世話，みんなの意見をまとめる，堂々としている，勇気があるの15項目）による影響がみられると考えることができる．また，このことは，競争遊びの頻度の違いが日常生活での行動形態に変化をもたらすと考えられ，競争的遊びの頻度は，この調査対象者の分類視点として有効である．

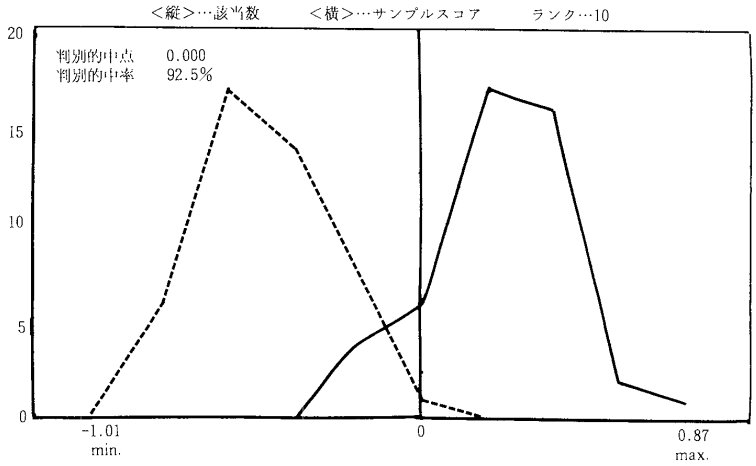

図2　競争遊びの頻度を基準とした遊び要因の判別度

②　幼児の運動遊びの構成要因からの判別

競争遊びの頻度の違いと運動遊びの構成要因（20項目）について林式数量化Ⅱ類を用いて判別した結果が，図２（Ｐ45参照）である．

競争遊びの頻度（外的基準）と遊びの要因項目（20項目を説明変数）から判別した結果，判別的中率が９２．５％と高い判別率が得られた．このことから競争遊びの頻度の違いは，運動遊びの要因項目に変化をもたらすことが示唆される．また逆に調査対象者群を競争遊びの頻度の違いにより遊びの要因項目との関連性を検討する事は，意味を持つと考える．

２．競争遊びの頻度と説明要因の有意差について

①　競争遊びの頻度と行動形態との有意差

競争遊びの頻度の違いと幼児の日常生活の行動形態のクロス集計による χ^2 検定を行なった結果が，表４である．

表４より，競争遊びの頻度により幼児の行動形態の違いがみられた項目のうち有意水準５％以下の項目は，自己中心的，独裁的，活動的，行動範囲が広い，競争心，挑戦意欲，積極性，よくしゃべる，声が大きい，自分の意見が言える，みんなの意見をまとめる，堂々としている，勇気があるの合計13項目であった．その傾向は，幼児の日常生活の行動としてより積極的で，人や物に対して進んで接近していく活動的な態度を形成する項目に違いがみられた．また，やや自己中心的で独裁的な項目に有意な差が見られることから自己中心的な思考の傾向もみられる．

このことから，競争遊びの頻度は，幼児の行動形態に差をもたらし，影響を及ぼす要因であると考えられる．

表４．競争の有無と説明要因の有意差判定表

	アイテム名	有意差
Ｑ９	自己中心的	**
Ｑ10	独裁的	**
Ｑ13	活動的	***
Ｑ15	行動範囲が広い	***
Ｑ16	競争心	***
Ｑ17	挑戦意欲	***
Ｑ18	積極的	***
Ｑ19	よくしゃべる	*
Ｑ21	声が大きい	***
Ｑ22	自分の意見が言える	**
Ｑ23	協力的	
Ｑ25	友達の世話	
Ｑ26	みんなの意見をまとめる	*
Ｑ27	堂々としている	***
Ｑ28	勇気がある	**

$p<0.001$-***　　$p<0.01$-**　　$p<0.05$-*

②　競争遊びの頻度と遊びの構成要因との有意差

競争遊びの頻度の違いと運動遊びの構成要因項目とのクロス集計による χ^2 検定を行なった結果が，表５である．

表5．競争の有無と説明要因の有意差判定表

	アイテム名	有意差
Q30	運動遊びの活発さ	***
Q31	運動遊びへの自主性	***
Q32	走ったり跳んだりの遊び	***
Q33	固定施設	
Q34	模倣遊び	
Q35	ボール，縄，ラケット	*
Q36	砂場	
Q37	試合やゲーム	**
Q67	力試し	***
Q68	模倣遊び	
Q69	用具の工夫	***
Q70	場所の工夫	***
Q71	ルールの工夫	***
Q72	遊び方の発見適応性	***
Q73	遊びでの冒険心	***
Q74	遊びの探索発見	***
Q75	遊びの種類	***
Q76	遊びのキッカケ（初め）	***
Q77	遊びのキッカケ（中）	***
Q78	遊びのキッカケ（終わり）	***

$p<0.001$-*** $p<0.01$-** $p<0.05$-*

表5より，有意水準5％以下で遊び要因項目に差がみられた項目は，運動遊びの活発さ，運動遊びに対する自主性，走ったり跳んだりの遊び，試合やゲーム，用具・場所・ルールの工夫，遊びの発見適応性，遊びの種類数，遊びのキッカケなど16項目に有意な差がみられた．その傾向は，運動遊びへの接近に関わる自主性，活発性を示す項目と，遊びの展開・発展に関わる試合・ゲームの場面での場所・用具・ルールの工夫，遊びの発見適応，遊びのキッカケなどの項目に分類できる．さらに，遊び仲間の人数の増加や遊び仲間の雰囲気など集団の発展に関わる項目に有意性がみられたと考える．

このことから競争遊びの頻度の違いにより，日常生活における幼児の運動遊びの内容に違いがみられることが示唆された．

3．競争遊びの頻度との関連度について

① 競争遊びの頻度と行動形態の関連順位

競争遊びの頻度の違いが，幼児の日常生活の行動形態に有意な差をもたらすことについては，前述した．その項目の関連性の強さの順位づけを示したものが表6である．

幼児の日常生活での競争遊びの関連性の高い項目は，高い順に活動的，積極的，堂々としている，自分の意見が言える，競争心，独裁的，挑戦意欲であった．このことから，幼児期における競争遊びの影響又は効果として，日常生活における事物に対する行動性を高める機能を有すると考えられる．

表6．競争の有無と関連の高い遊びの要因

順位	アイテム名		レンジ
1位	Q13	活動的	2.474
2位	Q18	消極的	2.022
3位	Q27	堂々としている	1.894
4位	Q22	自分の意見が言える	1.881
5位	Q16	競争心	1.020
6位	Q25	友達の世話	0.860
7位	Q10	独裁的	0.812
8位	Q17	挑戦意欲	0.635
9位	Q 9	自己中心的	0.529
10位	Q15	行動範囲が広い	0.471
11位	Q23	協力的	0.434
12位	Q26	みんなの意見をまとめる	0.384
13位	Q19	よくしゃべる	0.372
14位	Q28	勇気がある	0.359
15位	Q21	声が大きい	0.342

②　競争遊びの頻度と遊び要因の関連順位

競争遊びの頻度の違いは，幼児の行動形態に影響を及ぼすが，その関連の強さを順位づけして表わした結果が表7である．

表7．競争の有無と関連の高い遊びの要因

順位	アイテム名		レンジ
1位	Q33	固定施設	3.1683
2位	Q70	場所の工夫	2.8384
3位	Q69	用具の工夫	2.5711
4位	Q71	ルールの工夫	1.825
5位	Q30	運動遊びの活発さ	1.510
6位	Q31	運動遊びへの自主性	1.401
7位	Q67	力試し	1.299
8位	Q36	砂場	1.160
9位	Q72	遊び方の発見適応性	1.034
10位	Q75	遊びの種類	0.974
11位	Q68	模倣遊び	0.754
12位	Q35	ボール、縄、ラケット	0.732
13位	Q74	遊びの探索発見	0.505
14位	Q76	遊びのキッカケ（初め）	0.453
15位	Q73	遊びでの冒険心	0.405

表7より，競争遊びの頻度の違いにより1位に固定施設を使った遊び，2位に場所の工夫，3位に用具の工夫，4位ルールの工夫，5位に運動遊びの活発さの順で関連性の強さがみられた．したがって，競争遊びの影響を及ぼす機能は，前述の有意差とも関連づけて，遊びの展開・発展に関わる場所の工夫，用具の工夫，ルールの工夫，遊び方の発見適応を高めることと，運動遊びへの接近をより密接にする運動遊びへの自主性，活発性を育成することである．

4．競争遊びの要因項目の4歳・5歳児の比較について

競争遊びの頻度の違いによって，遊びの要因項目に違いがあるかを検討するためにファイ係数を用い，4歳児と5歳児の運動遊びの要因項目を比較し変化を検討した結果が表8である．

表8．競争遊びの要因項目の4歳5歳児比較

4歳児 項目	PHI	5歳児 項目	PHI
力試し	0.506		
		一人で遊ぶ	0.493
		次の運動遊びへの提案キッカケ	0.468
次の運動遊びへの提案キッカケ	0.450	遊び仲間の雰囲気	0.451
		力試し運動あそび	0.449
		遊び仲間の人数	0.389
		遊びの工夫	0.374
運動遊びでの冒険心	0.363	3歳まで十分子どもと遊んだ	0.362
遊びの適応性	0.350	遊びの適応性	0.347
一人で遊ぶ	0.319		
運動遊びでの探索発見	0.310		
仲間の人数	0.297		
3歳まで十分子どもと遊んだ	0.286		
仲間の雰囲気	0.275	遊びでの冒険心	0.279
遊びの工夫	0.273	運動遊びでの探索発見	0.275
運動遊びの割合	0.259	遊びへの関心	0.263
運動遊びへの関心	0.255		
		運動遊びの割合	0.249

4歳児においては，競争遊びに関連の高い要因項目は力試し，次の遊びへの提案・キッカケ，運動遊びの中の冒険心，遊びの適応性，一人で遊ぶ，遊び仲間の人数が挙げられる．

5歳児においては，一人で遊ぶ，次の遊びへの提案・キッカケ，遊び仲間の雰囲気，力試しの運動遊び，仲間の人数，遊びの工夫，3歳まで十分子どもと遊んだ，遊びの適応性が関連性の高い項目として挙げられる．

この結果より，4歳児から5歳児へ年齢が増すことで，競争遊びに関連性の高い項目に違いがみられる．つまり，4歳から5歳にかけて関連の強さが減少する遊びの要因は，力試しの運動遊び，運動遊びへの冒険心，運動遊びへの探索・発見，運動遊びの割合が挙げられる．

4歳から5歳にかけて関連が高まる要因項目は，一人遊び，次の遊びへの提案，キッカケ，遊び仲間の雰囲気，遊び仲間の人数，遊びの工夫，3歳まで十分子どもと遊んだがあげられる．

このことから，4歳児から5歳児にかけて競争遊びへの関連を視点として，仲間の人数や雰囲気，遊びの工夫，提案・キッカケの要因が高まる理由から，集団での運動遊びが増加し，集団で遊ぶ中での工夫，遊びの展開のしかたに特徴的な違いがみられると考える．また，4歳児においては，力試しの運動遊びと競争遊びの関連性が強くみられたが，5歳児においては，競争遊びが多くなることから力試しの遊びが相対的に低くなることが関連性の強さからも考えられる．つまり，4歳児は，力試しの遊びと競争遊びが並列の関係にあるが，5歳児では，競争遊びがやや優位なものに変化していくと考える．

結　論

幼児期において運動遊びを豊かにする方法として，運動遊びの課題の一つである競争は，個の充実と集団活動への参加を促す媒介として重要な要因であると考える．

競争遊びを行なう頻度の違いは，幼児の日常生活における行動形態に影響を及ぼし，かつ遊びの構成要因についても影響を及ぼすことが明らかにできた．競争遊びは，幼児に以下のような効果的な機能を及ぼすことが期待できる．

●競争遊びは，幼児を活動的かつ積極的にし，堂々と自分の意見が言える態度と競争心を養う，また，やや独裁的で自己中心的な面にも影響を及ぼす．

●競争遊びは，場所，用具，ルールの工夫を喚起し，運動遊びを活発に自主的な方向へ変容させる．さらに遊び方の発見適応性の能力を高める機能がみられる．

●競争遊びは，4歳児から5歳児にかけて集団で工夫した運動遊びを助成する．また，3歳児までの保護者との遊びの関わり度が，これに関与している．

以上のことから，幼児期における競争遊びの必要性は，極めて高いと考える．幼児の遊びを豊かにするために，競争遊び，力試しの遊び，模倣遊びの三つの要因をバランスよく幼児期に身につけることが重要であると考える．

文　献

1) 佐野　豪：楽しい運動遊び，大修館書店，2－3, 1985.
2) 薗田碩哉：遊びの構造論，不昧堂，139－141, 1983.
3) 高橋建夫，丹羽劭昭：児童の屋外遊戯時間に及ぼす社会的要因，体育社会学研究3，道和書院，227－264, 1974.
4) 増山　均：子ども組織の教育学，青木書店，24－27, 1986.
5) 富士ゼロックス：子どもの遊びとからだ・こころ，小林節太郎記念基金，105－160, 1989.
6) 中森孜郎：からだを育てる，大修館書店，342－345, 1982.
7) 石田恒好，西久保禮造：幼児の社会性ののばし方，14－17, 1979.
8) 松田岩男，宇土正彦：体育科教育法，大修館書店，122－128, 1978
9) 菅原　禮：スポーツ社会学の基礎理論，109－111, 1984.
10) 佐藤　裕：スポーツにおける競争－協同，新体育社，18－19, 1982.
11) 体育スポーツ社会学研究会：子どものスポーツを考える，道和書院，53－83, 1989.
12) 篠原弘章：行動科学の BASIC，ナカニシア出版，63－70, 1984.
13) 社会情報サービス：アンケート調査集計シリーズ，社会情報サービスKK，30－39, 1988.
14) 田中恒男：新・統計のまとめ方つかい方，医歯薬出版株式会社，47－50, 1982.